

## 北山友松子 医案①

今橋定休。年古稀を過ぐ。精神邁（お）いず、官債を収放するを業と為す。蓄積甚だ厚し。近年來、放ずること多く、収むること少なし。情に忤（さ）から）い意に逆らう。鬱滞して日有り。抑鬱の氣を使い留滞して散ぜず。胸腹に停まり、流暢すること能わず。腹胸虚脹、大腸虚悶、小便瀝少、面目四肢浮腫を致す。

後藤益庵に請い、調治すること三月余日。其の症瘳えず。更に口舌乾苦、飲食減少を加う。或（あるひと）、予を薦め、治を為す。之を脈するに左右沈中にて弦を帯ぶ。予謂わく、「怒氣結聚して発越することを得ず。升降常を失す」と。

遂に古方の八味逍遙散を用う。白朮を蒼朮に易（か）え、柴胡・茯苓を倍し、越桃・鞠芎・香附の醋製を加う。毎貼二錢。燈心・生姜各二分、流水にて煎じ服す。

五貼許（ばか）りにて小水通利し、浮腫全く退き、口舌味を知る。是において、改めて薛氏の帰脾湯を投じ、仍（な）お、越桃・鞠芎・香附を加う。五十貼を服して後、脈動蕩なるを得。然れども弦形尚あり。因って酒炒の白芍を加え、又服せしむること五十貼、脈症俱に和す。再び加うる所の三品及び白芍を去り、迺（すなわ）ち原方を用うることに五十貼にして薬を停む。時に壬申（一六九二年）秋月なり。